

中国の戦略爆撃機が必要とするロシア製エンジン

漢和防務評論 20160203 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

昨年9月の中国軍事パレードで、H-6K 爆撃機が CJ-10 巡航ミサイルを2発搭載してパレード飛行しました。H-6K は、旧型の H-6H に比べ、搭載量も航続距離も増大し、中国は米国に対する核反撃の重要な要素として発展させる方向です。この爆撃機に搭載したエンジンは、中国がロシアから輸入した IL-76MD に搭載するためと偽って輸入した D-30 エンジンです。KDR は、輸入した D-30 エンジンの総数から中国が生産できる H-6K は25機程度と予測していますが、中国は D-30 エンジンの複製型 WS-18 エンジンを開発していますので、この開発が成功すれば、H-6K の機数は増えるものと考えられます。

KDR バンコク特電：

中国の9-3閱兵式で空軍の H-6K 戦略爆撃機は2発の CJ-10 型空中発射巡航ミサイルを搭載していた。その直後、軍のメディアは、中国空軍が核及び通常弾頭兼備の攻撃能力を具備するに至った、と述べた。

中国空軍にとって、H-6K の最大の貢献は、三位一体の核攻撃能力を完成させたことにある。CJ-10 を搭載した H-6K は、旧世代の H-6H に比べ航続距離が延伸し、滞空時間が長くなり、中国の2番目の核反撃能力の実現に貢献した。

ロシア聯合航空機集団の権威筋は、モスクワ航空ショーで次のように述べた：我々は、中国が D-30 エンジンを戦略爆撃機に転用しているのを知っている。しかしこれは私個人では処理できない問題だ。モスクワ中央は、その結果を知るべきだ、と。また消息筋は：今までロシアは、エンジンの輸出契約を破棄することはしなかった。しかも2015年には、IL-76 輸送機搭載用として第二次契約分に当たる最後のグループの D-30KP2 エンジンを中国に提供することになっている。

”第二次契約分は、合計184台で、2012年から履行開始された。毎年約55台のペースで提供されており、2015年末には全て完了する。”

周知の通り、中国は、今回初めて D-30 エンジンを購入したのではない。KDR がすでに報道した通り：2009年に第一次契約が結ばれ、55台入手し終わっている。KDR は、現在就役中の H-6K が搭載しているエンジンは第一次契約分であると考えている。

消息筋は次のように述べた：2015年、中国は第三次契約を締結していない。言い換えれば、中国は第三次グループのエンジンは買わないということだ。なぜこうなったのか？KDR の結論は：中国製エンジン WS-18 は、D-30KP2 のコピー版である。したがって原版の D-30 エンジンはもはや必要としないからだ。

しからばロシアから輸入した 239 台の D-30 エンジンのうち、何台が IL-76 に搭載されたのか？新時代の H-6K は何機生産されるのか？中国が保有する IL-76MD の総数は 35 機以下である。これを全て新エンジンに換装しても 140 台しか必要でない。新開発の輸送機 Y-20 は 1 機だけしか生産されていない。

したがって残りの 99 台の D-30KP2 エンジンは H-6K に搭載されることになる。機数にすると、49.5 機である。予備エンジンを考慮したとしても、H-6K は少なくとも 25 機以上生産可能である。

D-30KP2 を H-6K に搭載すると、旧型の H-6H に比べ航続距離が 20%増加し、搭載弾量も H-6H の 9 トンから 12 トンに増加する。KDR の推定によると：4 発の CJ-10 を搭載した H-6K は航続距離 6500 KM 以上、作戦半径が 3000 乃至 3500 KM である。このことは、H-6K がロシアのシベリア領空を飛び越えて北極に進入、米国アラスカを攻撃できることを意味する。これは当然理論上の話である。

CJ-10 を搭載した H-6K は、ロシア極東の全て、シベリアの主要都市を攻撃でき、南シナ海の埋め立てた新島嶼基地に配備すると、射程はマラッカ海峡をカバーする。H-6K が中国東北部上空から射程 2000 KM の CJ-10 を発射すると、東京や北海道も射程内に入る。

三位一体の核攻撃能力とは何か？2010 年以前の中国の核戦力を見ると分かる。たとえば 1 艘の SSBN (092 型戦略ミサイル核潜水艦 SSBN) 及び 094 型 SSBN が配備されていたとしても、当時（今年年初に至ってもなお）JL-2 型潜水艦発射戦略弾道ミサイル (SLBM) は装填されていない。

したがって 2010 年以前の中国の核反撃能力は、主として DF-5 シリーズ、DF-4、DF-31/A の 3 つのシリーズの長距離戦略弾道ミサイルのみに依存していた。

サイロから発射される DF-5B は、たとえ貯蔵型液体燃料でありまた多くのデコイサイロが造られていたとしても、一旦核戦争になると、米国の第一次攻撃で発射サイロの 80 乃至 90%が破壊される可能性があった。これらの目標は公開されており、隠蔽が困難であった。本物と偽物のサイロがたとえ数 10 KM 離れていたとしても、依然、電磁パルス、核輻射、衝撃波の影響は避けられない。DF-4、DF-31/A は機動性があり、洞窟等に配備されたとしても、米国がこれらの目標を攻撃するのは困難ではなく、洞窟及び予備発射場を攻撃することによって破壊可能である。これらのミサイルの予備発射場は、座標が測定されており、固定され公開されている。

2 番目の核反撃能力の定義に関して、中国第二砲兵部隊は、最も重要な事実を隠している。それは、米国の ICBM が中国に向けて発射されたときの探知方法である。中国は、米国 ICBM が着弾する前に探知して、反撃の DF シリーズ ICBM を発射できるのだろうか？または米国の第一波 ICBM が中国の地上目標に着弾した後、即ち核攻撃を受けた後に、核による反撃を行うのだろうか？もし後者であれば、中国は仕返しする能力は無い。特に 2010 年以前はそうであった。理由は、前述の通りである。

もし前者であれば、20 乃至 25 分間の早期警戒ができる相当先進的な弾道ミサイル早期警戒衛星及び長距離フェーズド・アレイ・レーダー等の探知手段が必要である。

これは、概ね DF-31A を洞窟から引き出して立ち上げ、発射を準備する時間に相当する。DF-5B は、もしすでに燃料の注入が終っているのであれば、警報受令後、少なくとも 15 乃至 20 分間必要だ。

最後に実施する手順は、予定陣地 (DF-31A) に進入し、電気系統の点検を受け、ミサイルを立ちあげて (DF-31A) 発射準備を完了する。

もし弾道ミサイル早期警戒衛星が無く、X バンドレーダーのみならば、ICBM に対しては、4000 KM 前後の探知距離なので、早期警戒時間は 10 分間以下となる。中国は、早期警戒時間を増やすため、DF-5 の配備場所を湖南省にし、北極軌道から離れた。液体燃料の弾道ミサイルは、どうやっても 10 分以内の発射は無理である。2010 年以降、DF-31A の配備数の増加にともなって、上述の状況は多少改善されている。しかし根本的な改善にはならない。その理由は、米国は中国に比べ多くの核弾頭を保有しているからである。

H-6K の配備は、この状況を大幅に改善した。戦略爆撃機は、10 分以内に離陸できる。冷戦時代には、B-52 や TU-95MS がこのような戦術課題を頻繁に演練した。爆撃機は、地上のリモートコントロールでエンジンを始動することが出来た。パイロットは迅速にコックピットに入り離陸した。中国は、如何に対米戦略核報復をするか？たとえ陸上及び海上の戦略弾道ミサイルの 90%が破壊されても、理論上、空中には H-6K がある。もし H-6K がシベリアのロシア領空に進入し、また北極に進入した場合、ロシアは、如何に対応するか？

永遠の友などはない！中露関係が、一旦反目した場合、H-6K の脅威はシベリアの大部分と中央アジアの 3 分の 2 及びインドの国土のみである。

以上